

うつほ物語から源氏物語へ (一)

——主人公の造型をめぐる——

室 伏 信 助

一

源氏物語の比類ない表現が、散文におけることばの自立を可能ならしめた物語の構造と不可分の関係にあることを無視して論ぜられたとき、その表現論ないしは文体論が、物語の全体性から何ほどか遊離した場面論ないしは修辭学に局限されざるをえないのは、蓋し当然の帰趨でなくてはならない。^(註1)源氏物語におけることばの自立を可能にした要因として物語の構造それ自体を考えるべきことについては、かつて述べたことがあるが、^(註2)近代の小説とちがって古代の物語は、創造の基点となる発想そのものが、すでに幾多の制約のなかにしか存在が許されないものであった。^(註3)逆説的な言いかたをするならば、だからこそ、その制約を乗り越えるべくことばが自立したのだ、ということが出来る。

しかしながら、ことばの自立をみちびく物語の構造とは、抽象的な言辞をもって一般化することを極度にきらう性質をもっているように思われる。したがって、個々の作品に即して、その構造が具体的に究明され

うつほ物語から源氏物語へ

なければならないのはいうまでもないが、ここで作品を例にとって説明を加えるまえに、「構造」という語の概念について触れておかなければならない。ところが最近『古代物語の構造』(有精堂選書、昭44)なる快著を発表された野口元大氏が、その書の中でよく似た用語の「構想」「構成」とのちがいについて洵に明快な論断を下しておられるので引用したい。野口氏によれば「構想」とは「物語を組み立てる諸要素・場面の選択や配列、プロットなどのプランニング」をさし、また構成とは「作品として現実化された客観的側面を主に考える。作者の創作活動の結果であって、その過程を示すものではない。」それに対して「構造」は「構造する」と動詞化できない点にもっともよくその特徴があらわれているとおり、「現実的な事実の世界ではなく、抽象的な関係や意味の問題を取り扱うのにふさわしい概念」とされる。近ごろ「構造する」という表現が一部の人たちに用いられているが一般化しえないのは、やはり野口氏のいわれたような概念として「構造」なる語が現に生きている

をつくり出そうとしたところに、源氏物語の独自の構造を認めうるのである。登場人物の自然な展開を拒絶する、この屈折した人間像の形成はしかしながら、源氏物語を嚆矢とするものではなかった。われわれの知る限り、それは作り物語の系譜の上に、その最初の長篇うつほ物語の中に、生々しい痕跡をとどめているのである。私はこの事実を、うつほから源氏への直接の影響関係として捉えようとするのではない。それは多分無理であろう。しかし、主人公を創造するということが、決して生易しいとなみでなかったことの類似性において、あえてこの点に照明を当ててみようとするのである。

三

作り物語の系譜の上で、おそらく最初の長篇と目されているうつほ物語は、不思議なことに「俊蔭」と「藤原の君」の両巻がそれぞれ、

昔、式部大輔左大弁かけて、清原の王ありけり。

昔、藤原の君と聞ゆる一世の源氏おはしましけり。

と、昔物語の冒頭にふさわしい書き出しをもっている。その形式だけから見るならば、いずれを先後とも決しがたい。しかしその内容について見たとき、特に人物造型に目を移したとき、同一人物の性格描写に大きな懸隔が存するのを見出す。すでに諸家によって指摘されたところだが藤原兼雅のそれは、単に成立の先後を論ずる例証に挙げるだけの意味にとどまらないものがある。「俊蔭」巻では、俊蔭女との恋愛をきっかけに展開する物語にまず登場する。太政大臣の四男という素姓の紹介をはじめ、「玉光りかがやくうなる子」とその美質が語られ、「父おとど限

りなくかなしうし給ひて、片時も御目放ち給はぬ御子なりけり」と、親の愛を一身に集めたすがたが克明に記されるが、その兼雅と、俊蔭の遺志を体して癡屋に住む「わび人」俊蔭女とのめぐり会いは、やがてその間に生まれる主人公仲忠の出現を飾るにふさわしいロマンスとなっている。一旦は別れたものの再会后、仲忠母子を三条堀川の邸に迎えとった兼雅は、女三宮以下の妻妾たちの住む「一条殿にあからさまにもおはせず、異御心なし」というぐあいに、俊蔭女のみを愛する「まめ男」になりきってしまった。

ところが「藤原の君」巻を見ると、年立の上では明らかに六年後の兼雅のすがたが描かれるが、それは「俊蔭」巻の兼雅像とは想像もつかない変わりようである。

かくてまた右大将藤原兼雅と申す、年三十ばかりにて、世の中心にくくおぼえ給へる、限りなき色好みにて、広き家に大きな屋ども建てて、よき人々の娘かたがたに住ませて住み給ふありけり。このぬし、あて宮をいかでとおぼす。

貴宮求婚譚の一節として、兼雅が登場してくる部分だが、この改まった紹介の仕方といい、「限りなき色好み」という性格といい、「俊蔭」巻で描かれた兼雅の人間像の印象は完全に覆されたばかりでなく、驚くべきことに「俊蔭」巻で異心なく愛していたはずの俊蔭女については、ついに一片の記事すら見出すことができないのである。このように「藤原の君」巻の兼雅像は「俊蔭」巻のそれからなんら影響を受けることがないばかりか、他の登場人物の例に照らし合わせても「俊蔭」巻が、正

確には兼雅出現の部分以降が、「藤原の君」巻の成立後にはじめて執筆されたにちがいないことは、早く笹淵友一氏が詳細に論ぜられ、^(註6)以後の諸家の等しく認めるところだが、いま兼雅像だけに限って見ても、先に触れたように「俊蔭」巻が後に書かれたために、人物造型に矛盾を来した、と簡単に言っているだけでは問題が片付かないのである。色好みの兼雅がまめに人に変貌するのは、俊蔭女の異常な美質を保障するためのもの、というにとどまらない。そこには、主人公仲忠の出現に象徴される「俊蔭」巻自体の、重い主題性をみちびかなければならなかった、この物語の基本構造に関する重要な問題が提出されていると思われるのである。

四

前節において、「藤原の君」巻に登場する兼雅が「限りなき色好み」として、貴宮に求婚する人物であることを見てきた。しかし、貴宮に求婚する人物は彼一人ではない。「藤原の君」巻に限っていえば、彼を含めて都合十一名の求婚者が登場する。「嵯峨院」巻以降になれば、その数はさらに増加するが、いままさしあたり「藤原の君」巻に限って見ると東宮をはじめ宰相源実忠、右大将藤原兼雅、平中納言正明、兵部卿宮、待従源仲澄、上野宮、三春高基、滋野真菅、三の宮、兵衛佐良岑行正らである。大勢の求婚者が一人の女性に集中して求婚するという構想は、明かに竹取物語の五人の貴公子のそれを踏襲し、拡大進展せしめたものといえよう。しかしかくや姫の求婚者たちがその氏姓こそ異なれ、いずれも求婚に失敗する道化役として一様に登場してきたのに対し、うつほ

物語の場合は、少くとも三通りの類型に分けて考えることができそうである。

片桐洋一氏は、うつほ物語生成の基本部分に「原型あて宮物語」なるものを想定し、その中に登場する求婚者の登場の仕方に三様の方法があることを指摘された。^(註7)その第一は「原型あて宮物語」の基本要素である年中行事絵的構成を崩さない方法で、実忠、兼雅、平中納言、仲澄、兵部卿宮、三の宮、東宮などの場合。また第二は仲頼、行正らで、途中中断回想方式とも呼ぶべき方法で登場。さらに第三は先の基本構成と全く異質に、年月や季節を無視して登場する上野宮、三春高基、滋野真菅らの場合である。

片桐氏のいわれる「原型あて宮物語」なるものが果して現存貴宮求婚譚を透視して想定しうるかどうか甚だ疑問であり、^(註8)前記の三様の登場の仕方にしても当初から併存したと見るよりも、年中行事絵的構成を基本に漸次形造られていったと見る方が矛盾なく理解されるように思われる。したがって原型なるものを想定するよりむしろ現存「藤原の君」をまず基本として、そこに表れた登場方式の類型と見た方が無難ではないか。その場合、「嵯峨院」巻に登場する仲頼だけが除かれるが、他はすべて片桐氏の裁断されたとおりで、異論をさしはさむ余地はない。さて右の三類型のうち、第一の類型はその数から見ても断然他を圧倒して優勢であり、おそらく求婚譚の根幹を形造った要素とみて間違いあるまい。その叙述をとおして絵を伴うと見られる部分の多いことも、またそれに代わるものとして歌の羅列が目立つのも、すべてこの類型の示す

特徴である。登場人物についていえば、皇族をはじめ貴族、中には貴宮の近親者といった人達で占められ、色好みや美徳とし、必ず歌を詠んで懸想するというみやびの技に長じている。洗練された恋の情趣を尊び、その反復積み重ねの中に、恋そのものより恋の情趣にすべてをかけた王朝貴族のこの上なく単調で緩慢な生活のリズムが、これまた平板な年々行事の叙述に織りこまれ、すべて現在時においてただむなしく流れ去ってゆく、そうした事実の世界をみごとに記録してしまっているのである。

それに対して、第二の類型に該当する行正の場合は、途中中断回想方式といわれる特異な方法で登場してくる。昔、花園という殿上童（行正）が十歳のとき、唐人に連れ去られて唐土に渡ったが、そこで学問や音楽を修得して、十八歳のとき交易の船に乗って帰国し、帝に重んぜられて兵衛の佐となり春宮・若宮らの音楽教師に就任、よい結婚話も断ってひたすら貴宮に懸想する、というふうに明らかに第一の類型とは異なる紹介法がとられている。ここで注意されるのは、行正の前歴がその規模こそ違え、俊蔭の漂流譚に類似しているばかりか、学問・音楽に秀でるなど、俊蔭の人間像を彷彿とさせるに足るものがあることである。勿論、相違点も多く、中でも音楽の技芸をもって宮仕えした行正に対し、俊蔭は帝の要請した宮仕えを断ったことは著しい違いである。さて、行正登場の記事が、桑原博士氏のいわれるように、後からの挿入と考えるべきかどうかは必ずしも明らかではない。^(註9)この記事の中の現在時が、前後の記事から知られる季節の順行に合致しないという見解は当たらないにしても、少くともこの巻の基本が時間の順行を原則としているのに、

うっほ物語から源氏物語へ

過去に遡って話を始めるといふ形破りの行き方を示した点で、すこぶる注目に値する事実といわねばならない。それは同時に、第一の類型が現在時に固執して人物の造型を試みるのに対し、過去の重みを負うた人間が描き出されてくることは、その認識の方法に大きな隔たりがあることを示している、ということができる。しかし、この新機軸も、結果として貴宮求婚譚に繰り込まれてしまう一要素に過ぎない以上、年々行事絵的世界に彩りを添えただけで、その世界そのものを批判し変革を求める要因に転化することは、ついになかったことを知るべきであろう。

しかるに第三の類型は、第二のそれと著しく異なる要素をいくつかもっている。片桐氏のことばを拝借すれば「この三人は最後まで年々行事絵的構成とは異質のままに存在するのである。彼らの登場する場面は年月や季節は些かも記述されることがない。いわば、彼らは登場の最初からアウトサイダーなのである。」^(註10)

このようにして彼らは先ずこの物語の基調たる年々行事絵的世界の制約から完全に遁れ出る資格を与えられ、そのことによって逆に、およそ考えられる反貴族的性格のすべてを誇張して担わされる結果となった。例えば、上野の宮という歴とした皇族でありながら、同時に受領でありしかも「物ひがみ給へる」性格を与えられたために、貴宮の父正頼から嘲笑され問題にされないが、それで諦めてしまわないばかりか、陰陽師・かうなぎ・博打・京わらはべ・姫・翁といった民衆を集めて、滔々と自己の所懐を述べ、彼らの意見を求めるのである。

われこの世に生まれてのち、妻とすべき人を、六十余国・唐土・新

羅・高麗・天竺まで尋ね求むれど、さらになし。この右大将源正頼のぬしの女子ども、十余人にかかりてあなり。一人にあたるをば帝に奉りつ。そのつきつぎ、悉くにととのへたなり。残れる九に当るなむ、よもの国に聞きしに、かくばかりの人間えず。この女なむ、耳につく、心につく。しかあるに、父大将に乞ひ、正身に乞ふに、女も大将も、いまに承け引かず。いかなる仏神に大願を立て、なでふ事のたばかりをしてか、女のおもむくべき。

これに対して比叡の僧宗慶は、あらゆる寺社に御あかしみてぐらを奉納すべきことを勧め、また窮迫した大学の衆は、現実社会の不合理をとりあげ、「才ある者は沈め、無才の男子は先に立つ。かくの如くの人の嘆きを除き給はば、人の嘆き願ひ満つべ」きことを進言、そのいづれにも宮の同意共感を得て、直ちに実行に移されたのである。貴宮を得たい一心からとはいえ、僧や学生らのそれぞれ筋の通った意見は悉く採用されるというあたりに、ただ話の筋を面白おかしくする効果だけを求めたのではない、この物語を受容する読者の反応を微細に計量しつつ描き進める作者の存在を思わずにはいられない。したがって京童の、暴力に訴えてでもという意見に対する博打ちの、同じ非合法ならもつと知恵をばたらかせて貴宮を誘拐するに限るといふ計略を、「おもしろきこと宣ふくそたちかな。ただかうなり、この事は」と、忽ち賛成する宮の言動は、これまた現実的合理的精神の顕現として、大方の読者の諒承を期待して仕組まれたものと考えられる。こうした掠奪婚が罪に当らないばかりでなく、深い愛憎の表現として認められていたらしいことは、「葦開」

中巻で、兼雅が息子の仲忠に向って述べる回顧談の中にも「宮をば盗みもて来て、さるものにすゑ奉り」と記され、また伊勢物語の芥川の段や源氏物語の「若紫」巻の中にも同様の行為が描き出されている点からも納得されよう。

しかし、この計略が事前に正頼方に漏れ、逆にまんまと賈貴宮をつかまされてもそれと気づかずに喜ぶ上野の宮を記すあたりに、この人物造型の結論が何であったかを露わに示しているといえよう。この事實は、宮が初めから嘲笑され否定されるべき人物として措定されたという構想上の事實をさすのではなく、いかなる合理的実践的精神も、それが反貴族的反体制的要素をもつ限り敗北は必至だという、苦い認識を裏書きする事實だということである。これは他の二人——高基・真菅の場合にも同様に規定しうる性格をもつが、このことを十分理解しない限り、やがて「俊蔭」巻が巻頭にすえられる物語の内的な仕組み——構造は、成立の過程を形態の上からただ外形的に捉えるに過ぎないであろう。表現に即して事實を構造論的に帰納してゆくなから、この物語の複雑な成立過程に応じた文学的真実ははじめてその真姿をわれわれに示すに違いない。

(未完)

〔註〕

- 1 拙稿「源氏物語の構造と文体——「葵」巻についての覚え書き——」〔国文学〕昭45・5) 参照。
- 2 拙稿「源氏物語の構造と表現——「賢木」巻をめぐって——」〔源氏物語研究と資料〕昭44刊所収)
- 3 拙稿「末摘花について——源氏物語の発想法——」〔国語と国文学〕昭31・6) および「源氏物語の発端とその周辺」〔国学院雑誌〕昭32・6)

は極めて一面的な未熟な試論に過ぎないが、発想から創造への過程を考察しようとしたものである。

- 4 拙稿「歌物語から源氏物語へ——物語の形成と和歌の問題——」（「言語と文芸」昭44・9）
- 5 和辻哲郎「源氏物語について」（「思想」大正11・12、のち『日本精神史研究』大正15刊所収）
- 6 笹淵友一「宇津保物語巻序放」（「文学」昭12・1）
- 7 片桐洋一「あて宮物語と忠こそ物語——宇津保物語首部三巻の巻序と成立——」（「文学」昭31・9）および「宇津保物語の方法——その一、執筆態度と執筆過程（一）——」（「女子大文学」昭36・2）
- 8 野口元大「うつほ物語の形成——「嵯峨院」を中心に——」（「熊本大学法文論叢 文科篇12号」昭35・6、のち多少改められて『古代物語の構造』昭44刊所収）を参照。
- 9 桑原博史「宇津保物語の成立過程に関する一考察」（「言語と文芸」昭34・11）に対し、註7の片桐氏の批判がある。
- 10 註7の「宇津保物語の方法」